

石川淳研究

渡辺喜一郎

国文学研究叢書

明治書院

著者略歴

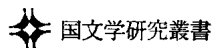
渡辺喜一郎（わたなべ きいちろう）

1948年 福井市に生まれる。

1972年 東京教育大学体育学部卒業。

現在 北陸高校教諭。

現住所 〒910 福井市足羽4-3-28



石川淳研究

定価 2,800円

昭和62年11月15日 印刷

昭和62年11月20日 発行

著者 渡辺喜一郎

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

印刷者 柳沢印刷株式会社

代表者 柳沢一郎

製本所 正文社製本



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京（03）292-3741（代）

振替口座 東京 3-4991番

©1987 Kiichiro Watanabe ISBN 4-625-58049-8

目次

序.....	野口武彦	3
--------	------	---

石川淳——人と文学——		6
-------------	-------	---

I

石川淳伝記的研究——作家以前——		16
付 昭和五十年以後年譜.....		45

II

石川淳著作・著書目録.....		50
石川淳全集末収録作品案内.....		97

III

石川淳試論——『佳人』まで——		124
『紫苑物語』試論.....		144
石川淳の江戸と革命幻想——『至福千年』論のために——		162

『狂風記』材源考	197
『六道遊行』の時間	217
Ⅳ	
石川淳と中野重治(一)	220
石川淳と中野重治(二)——『森鷗外』をめぐる——	230
初出一覧	261
あとがき	262

序

野口武彦

昭和五十五年に大作『狂風記』が完結して七〇年世代を驚倒させてからこのかた、石川淳氏は、かならずしもかつての「選ばれた少数」のための作家ではなくなったかのように見える。つとに「資本主義と共産主義とが力をあはせてアナーキズムをはさみ打ちに殺して以来」と喝破していたこの作家は、ようやく時代のアナーキイ状況のうちに、作品の原質部と肌ふれあえる読者とふたび邂逅したといった具合なのである。だがそのことは決して、石川淳文学の読者がいやでもつきあわねばならぬ独特の深遠さが消失したことを意味するものではない。ましてや、研究者はいよいよ、みずから「選ばれた少数」であることの試練に耐えなければならないだろう。

3 序

このたび渡辺喜一郎氏が世に問うこの一冊の研究書は、対象に肉迫する意欲の、いやむしろ執念の度合において、断然他からぬきんでている。一作家への傾倒の告白などというなまかなものとは違う。おそらくは作家本人も忘れてしまっているであろうような生時環境や交友関係のデテール、作家的出発以前の初期文業の数々、江戸俳諧と二十世紀フランス文学とアナーキズムとが一種渾沌とした諸調をかなでていた大正の青春というものの不思議さを、渡辺氏は敬服すべき精査の努力をもって、

読者に明らかにしてくれるのである。この著述は、たんなる伝記考証の域を越えている。

これまでの多くの石川淳年譜にあって、大正末年から昭和初年代までのほぼ十年間は、まず空白に近かったといってよいだろう。石川淳氏は、よいなことを語らない。いずれは誰かが手をつけなければならぬ領域だった。それにもう一つ明らかにされたのが、昌平黌儒官までたどられた石川家の出自。そしてその明治維新後の沿革。渡辺氏の考証は、たんなる自己目的としてのジェネオロジイには向わない。どこまでも石川淳文学の原点を求めて、いつてみれば、江戸幕末から明治へという未生体験、大正アナーキズム、八〇年代状況的ニヒリズムを通底するような精神の地下の大河の源頭をそこに探ろうとする。

だからたとえば、『至福千年』論のために「と副題された「石川淳の江戸と革命幻想」が、特別な熱意をこめて語られることになる。「石川淳と「江戸」の結びつきは深い。出生後、幼少期、中学期と浅草三好町に生活し、其処はまた、当時「江戸情緒」を色濃く残す地域・環境にあった」と渡辺氏は書くのだが、もちろんそれはただの回顧趣味ではない。地理空間がただちに文学空間であり、地点としてのトポスがおのずと精神のトポスをかたちづくるような石川淳世界のマッピングこそを渡辺氏はめざしているのである。

今後、若い世代の間から石川淳研究者は何人も出て来るであろうが、その将来のためにも、この一冊が欠かすことのできぬ一礎石となるであろうことを疑わない。

石川淳——人と文学——

石川淳——人と文学——

人物概観

石川淳は、明治三十二年（一八九九）三月に生まれ、今年八十八歳の米寿を迎えた。なおかつ現在も、『すばる』に「蛇の歌」を連載中（昭和六十二・一）で、その文筆活動は全くと言って良いほど衰えを見せていない。

一九〇〇年前後に出生し、「大正デモクラシー」の時代には二十歳前後であり、「大正教養主義」を通り抜けた作家、評論家の多くは、現在既にほとんど他界した。とりわけ、加藤周一氏の言う「軍国主義と太平洋戦争の時代に、壮年期を過ごしながら、流れに抗して、大勢に順応することを拒否し、一貫して自己の立場に徹底した」（『日本文学史序説』）三人の中、淳以外的小林秀雄、林達夫が次々と世を去り、親交の深かった河上徹太郎、吉田健一も急逝した。

現代文学の「混沌」が論議される中で、「近代文学」が見直され、ある意味では「復古ブーム」の感さえある現在、その「近代文学」の中で育った作家の最後の「生き残り」と言えるかもしれない。

石川淳は、浅草三好町に生まれ、祖父石川省齋に育てられる。省齋は幕末の昌平黌儒官であり、淳の幼少期には家に多くの漢学者、文人が出入りした。また、そのころ毎日のように省齋から「論語」を誦習させられた。

一方、近隣には「文明開化」の象徴とも言うべき風物が数多くあった。蔵前天文台に近く、下谷にはキリシタン教会、表通りには写真屋、幻灯があり、電車がはしっていた。淳は、このような「近代化」の「洗礼」を受けて育ったと言える。

中学期には、浅草の映画、落語、講談、歌舞伎などに通い、また長唄、三味線の師匠や能の家元とも親交があった。

以上のように既に少年期に、漢籍、「近代」江戸文化に親しんでおり、これらの素養を背景に頼山陽、漱石、鷗外の著書を読し、時折、淡島寒月、秋田雨雀などを訪ねている。

その後、幕臣の伝統から来る「ドイツ嫌いのフランス好み」からか、東京外国語学校（現東京外国語大学）仏語部に入学し、フランス文学に触れることになる。ポール・ヴァレリー、アンドレ・ジイド、アナトール・フランス、シャルル・ルイ・フィリップの主に象徴派を中心とした作品を読し、クロポトキン、バクーニンなどのアナキストの読者でもあった。また、講師を通じて初めてマルキシズムにも触れ、当時の西洋の最新の文学、思想を吸収しながら、文学の道に進む決意を固めていく。

その後、同人誌『現代文学』（大正十三年）に習作をいくつか発表し、『日本詩人』（大正十、十五

年、新潮社）には評論を発表している。その間、高等学校の教師をするが間もなく辞し、文学上の、あるいは“生き方”の挫折からか、数編の翻訳を除き、ほとんど沈黙する。この時期、住居が定まらず、“デカダン”の生活が続いた。

数編のエッセーの後、昭和十年（三十六歳）処女作「佳人」を『作品』に発表し、昭和十二年の「普賢」で第四回芥川賞を受賞する。

戦時体制下では、昭和十三年の「マルスの歌」（『文学界』）が発禁処分にあった後、戯作を中心とした江戸文学に文学上の活路を見だし、エッセーや現代語訳を発表する。この時期は“江戸遊学”とも呼ぶべき“韜晦の時代”であったと言える。

戦後は堰を切ったように次々と作品を発表していくことになる。

文学の特徴

浅草に生まれ育った石川淳は、色濃く残る江戸文化の伝統に接し、また“文明開化”を間近に見聞きしながら成長した。そして、いったんはフランス象徴主義を方法上の基本において文学を志した。しかし、大正末の“政治の嵐”に抗し切れる理論を持ち得ていなかったために先に触れた“沈黙”となる。

しかし、いずれにしても昭和十年「佳人」で文壇への遅い登場をした時点では、方法上の確固とし

た理論を持っていた。昭和十七年にまとめられた文学論『文学大概』の中で次のように述べている。

△一篇の文章が出来上った時、全体が意味するものと不可分な関係に於て、そこに展開された精神の格闘の跡が生命ある文字の像として、紙の上に自立する。それを文章の形式と言う。▽

△文体とは、書かれた言葉のながれに現われるこの小世界像の形相にほかならぬ▽

△言葉の運動を起させ、生命を光らせるために、言葉の流れに於て精神の努力が顕現されるであらう。この時、かくして書かれた文章の内容とはそこに持続された精神の努力の量であり、形式とはその努力の言葉に於ける作用である。▽

△小説は散文を方法として書かれた散文である。▽

△作品の美を支えるものは意想の世界に於ける調和である。その世界を実現するに当って、材料組立のためにはたらく主因は何か。すぐに答えよう。モラルである。▽

△小説とは、作家が小説とは何かということを知らうとする努力に於て成立している。▽

この中で、文学の「形式」、「文体」、「内容」や、「モラル」などについて述べ、小説（＝散文）についての明りょうな定義付けをしている。この内容の根底には、思想家モンテーニュや、アラン、ヴァレリー、ジイドの文学者の影響がうかがえる。しかし、淳の文学はこれらの「理論」だけではなかった。

石川淳の文学を方程式にたとえるならば、その根は三つある。一つが先に触れた「理論」に見られ

るフランス象徴派文学であり、他の二つは江戸文学とアナーキズムである。

江戸文学については、先に触れたように、落語、講談、歌舞伎、長唄、能などの娯楽ものへの興味から発展して、中学期には淡島寒月を訪ねたりしながら、次第に江戸文学そのものに関心が移っていったといえる。本格的に江戸文学を読み、研究したのは昭和十五年ごろの戦時体制に入ってからである。『渡辺崋山』、『秋成・綾足集』、『義貞記』などを発表したり、江戸戯作、狂歌などに親しみ、大田南畝などの墓を訪ねたりもしている。これらの中から、特に文人、狂歌師の“生き方”や、“パロディ”、“饒舌体”などを自己の文学の方法に取り入れていったものと思われる。戦後の多くの短編は、この“方法”が基本となっている。

アナーキズムについては、既に中学期から大杉栄の読者であり、辻潤の家にも近く、後にはクロポトキン、バクーニンの著作を読み耽っている。大正末から昭和にかけてはアナーキストグループとの接触もあり、その中でも百瀬二郎（エリゼ二郎）との出会いが重要であろう。“絶対自由の精神”は創作上の一貫した方法であり、またアナーキストが実名で登場したり、アナーキズム運動を扱った作品も多くある。

作品紹介

石川淳は、小説家として、さらに随筆家としても、その名が知られている。『石川淳選集』（昭和五

十六年三月全十七巻完結、岩波書店発行）では三分の一以上が随筆となっている。しかし、淳の文学世界を理解する上では、まず小説であろう。

〔習作期（大正十年代）を除くと、小説が多く書かれた時期が二度ある。第一期が処女作「佳人」からの五年間であり、第二期が戦後昭和二十一年から三十六年までの十五年間である。長編を除き、「傑作」と呼ばれる作品は、そのどちらかの時期に執筆されたものである。〕

「佳人」は昭和十年五月『作品』に発表され、年齢的には遅い文壇登場であった。同じ年に生まれた川端康成は既に「新感覚派の旗手」として騒がれていた。長い沈黙後の作品発表である当時の心情を、主人公に見事に語らせている。「わたしは何を書くにしてもまずこれを書いておかなければならなかったのだ、樽の中の酒を汲み出すためには栓を抜くことから始めるようなもの」と、その内容は決意に満ちたものとなっている。

第四回芥川賞受賞作「普賢」は昭和十一年六月から九月に『作品』に連載された。ここでは、作家以前の生活の断片をリアルに描きながら、主人公が「ことば」をつかみ取っていく過程が描かれる。この作品は私小説的色彩の濃いものだが、その最後の作品であると言ってよい。

昭和十三年一月『文学界』に発表された「マルスの歌」は、軍歌（「マルスの歌」がもてはやされた体制への、痛烈なアイロニーのこもった「小説の書けない小説家」の物語である。この作品にみられる「反軍国調」のため『文学界』が発禁処分にあった。

戦後の焼け跡の巷間をリアルに描き、廃虚の中の「救世主」を思わせる「少年」を配した作品「焼け跡のイエス」は昭和二十一年十月に発表された。またこのころの作品「黄金伝説」が、「黒人兵の描写が占領軍の忌避に触れ」、作品集から削除されている。

日米安全保障条約が締結された二年後の昭和二十八年三月『群像』に「鷹」が発表される。ある理想社会への「革命」が「幻想」に終わりつつあったこの時期に、「革命」を「明日語」や「明日の歌」によって象徴的に語りながら、「革命という伝説を実現しようとする精神」の働いた作品となっている。筆者の最も好きな作品である。

「紫苑物語」は昭和三十一年七月『中央公論』に発表され、翌年この作品によって芸術選奨文部大臣賞を受賞している。小説の時代背景を中世におき、人間の「死」と「生」との争闘を描き、他の作品にあまり見られない叙情性、幻想性に富んだ作品。

「八幡縁起」（昭和三十三年『中央公論』）は、「古事記」を照射しながら「新解釈」を加え、古代歌謡をとり入れたパロディー風の作品である。その意味で特異な作品となっている。

「荒魂」は、昭和三十八年一月から翌年五月まで十六回にわたって『新潮』に連載された最初の長編である。冒頭の「佐太（主人公）が生まれたときはすなわち殺されたときであった。」のように、逆説的表現が多く、そのことによりイメージの喚起力が効果的な文体となっており、石川淳文学の特徴的な面が表出した作品である。

「至福千年」は、昭和四十年一月から翌年十月まで二十一回にわたって『世界』に連載された。数少ない長編小説の内の一作である。江戸の隅田川兩岸を中心とした都市空間を、文学的想像力の世界に見事に現出させ、その意味では作者の「江戸」への「思い」が伝わっても来る。また、この作品は作者の一貫したモチーフである「革命」の問題を、西洋の「千年王国主義」に材をとりながら、「指導者」や「運動主体」の力学としてとらえ、「幻想」に終わっていくそのプロセスを描いている。

畢生の大作とも言うべき「狂風記」は、昭和五十五年四月に完結するまでの十年の間『すばる』に連載されたものである。長野主膳によって書かれた卷子本「市辺忍衛別命山陵考」を一つの「種」としながら、「幕末」から「現代」を貫通して、やはり「反逆」のダイナミズムが描かれる。この「狂風記」は、それまでに試みられた文学的方法の総てが塗りこめられたとも言って良い作品で、単行本（昭和五十五年十月、集英社刊）はその年の文芸作品の代表作としての評価を得た。

その後も、『六道遊行』（昭和五十八年四月、集英社刊）、『天門』（昭和六十一条一月、集英社刊）を刊行した。ここに紹介したのは主な小説作品である。この他に随筆集、評論集など多くの作品があるが、省略した。

